

[シンポジウム1]

エドワード・ジェンナーの博物学と
その師 ジョン・ハンターの外科学

渡部 幹夫

順天堂大学

牛痘法による天然痘の根絶は人類の歴史に於いて、その善きものとして否定する人のいない快挙といえる。エドワード・ジェンナーの1798年の開発の報告、日本の受容過程、1980年WHOの根絶宣言を中心に多くの史的研究が行われてきた。ウイルス感染症である天然痘について、細菌学もウイルス学もない時代に牛痘法による天然痘の予防の可能性を確認したジェンナーは忘れられてはならない。1879年に疾病予防の可能性を考え接種に用いるものにワクチンの言葉をあたえたのはパスツールである。この時代、まだウイルスは見えない。

天然痘に一度かかった人が再びかかることがないことを人智として、人為的に天然痘にかからせる方法、すなわち人痘法が中国、インド、トルコで古くから行われていたと云う。西欧に紹介したのはイスタンブールにイギリス大使夫人として滞在して、1721年に自分の子供に人痘を受けさせたモンターギュ夫人によるという。その後、人痘法は大きな危険を伴うものの、広く西洋で行われていた。その時代に牛痘法を開発したジェンナーと、その師ハンターの現代に残る博物館を2009年に見学した経験を中心に紹介する。

ジェンナーは1749年英国パークレイに生まれ、12歳から医学を学び、1770年から3年間ロンドンのハンターのもとで解剖学・外科学の修行をした。その後故郷での開業医を続けながら博物学の研究を続けた。1789年にカッコウの托卵の論文で王立協会会員に選ばれている。1796年乳搾りの女性の手にできた牛痘疹の内容を少年に接種、その後2回の人痘接種によっても発症しなかったことを牛痘法の発見としている。この論文は王立協会に受理されず、1798年自費出版した『An inquiry into the causes and effects of the variolae vaccinae ...』により知られることになった。牛痘法の開発に対しイギリス議会は多額の賞金をあたえ、反対する運動もあったが、ヨーロッパ諸国から世界に広がり、1849年には日本でも成功した。ジェンナーは、動物の冬眠や、鳥の渡り、気球の飛行など博物学的な研究をつづけ1823年に亡くなった。それを導いたのが師ハンターの『but why think, why not trie the Expt.』の言葉とされるがこれはLetters from the past From John Hunter to Edward Jennerに見つけることができる。この手紙はハンターのロンドンへの誘いを、パークレイでの生活を好むジェンナーが固辞する事に対する返書の中にある。

近代外科学の祖とされるハンターは1728年スコットランドに生まれ、ロンドンにて解剖教室を開いていた兄に合流して、20歳で解剖学・外科学を始めた。1767年王立協会会員に選ばれる。ハンターは歯科学、産科学、血管外科、移植外科、性病研究や死者の蘇生実験など現代につながる仕事を行った。解剖の死体を墓から盗掘したと言われるし、珍しい動物を世界中からあつめたという。表玄関は治療を求める患者であふれ、裏門からは死体が運び込まれる家であったという。ハンターは1793年亡くなったが、現代はその試みを多くの犠牲や忍耐を無償で寄与するものにより実現してきた。

1980年に天然痘は、疾患としては地球上からなくなり、そのウイルスは2カ所の研究施設以外にはない。しかし、牛痘種痘ワクチンは2005年に世界40カ国に7億2000万人分、日本には3100万人分の備蓄があったという。種痘後脳炎の存在は医師の間ではよく知られていたというが、日本では、1976年の種痘廃止まで存在した。感染症に対するワクチンの効果は現代を成り立たせているが、安全性や、新たなワクチン開発の議論は医学だけでなく主題としての意味を持ち、まだ成熟されていないと考える。